

## 「中本達也戦後の軌跡」

今回の企画展示は、中本が本格的に油絵に取り組むまでの戦後数年の足跡をたどるものである。

中国戦線から戻った中本達也は舞台美術家三林亮太郎のもとで装置を担当した。三林亮太郎（1908-1987）は、築地小劇場、松竹少女歌劇などで舞台美術を担当し、武蔵野美術大学で教鞭をとっていた。その関係で中本に舞台の仕事させたものと思われる。

1947年（昭和22年）には『トーキョー・フォーリーズ』という舞台装置を担当しており、資源館にもその舞台スケッチ（展示作品）が数点残されている<sup>1</sup>。



フォーリーズとは1930年代に流行したアメリカのレビュー舞台のことで、戦後日本でも『寶塚フォーリーズ』などが演じられており、当時流行ったレビューの代名詞。資源館に残されている舞台美術の原画、そのタイトル『桃色ホテル』『百万円の狂宴』『人肉デカメロン』（展示作品）などは、軍国主義日本から一転、享楽と猥雑な戦後世相をうかがわせる。保存状態は良くないが、ぜひご覧頂きたい。

中本の演劇は本格的なものだったらしく、1950年には「こっくり座」という人形劇団を組織し、人形制作、脚本なども自ら行っていたという。東映動画の発足にあたってはテアトル・プッペ<sup>2</sup>と協力してインドの伝統的戯曲『シャクンタラー』の影絵制作もしている（展示作品）<sup>3</sup>。



1948年に臼井都和結婚。1950年第2回読売アンデパンダン展に『女』（1949年、展示作品）を1952年第16回自由美術展に『回想』（展示作品）を出品し、会員に推挙されている。1950年には三軒茶屋から国立に居を移し、本格的に油絵に取り組むこととなる。移住当時の住いについては、はっきりわからないものの、いくつかの証言では、はじめに小さなアトリエが建てられたが、まもなく現在のアトリエを建築し、何回か増築をしたようだ。こうして子どもたち

をあつめての絵画教室が始まり、時には人形劇をすることもあったという。

転居前後の1950年から51年には、西荻書店刊『幼児の童話』『六平アルバム』『はなしのはなたば』などの子ども向けの本の装丁、カット（展示作品）も手掛けている。

中本が舞台美術と子ども向け絵本の挿画、あるいは絵画教室によって日々の糧を得ていた時代、日本美術会では戦争協力作家たちへの糾弾、戦争責任が問われていた。戦争協力作家たちは、海外へと逃げていくもの、居直るもの、あるいは放棄してしまうものなど、戦後という「狂宴」に埋没していく時代である。誰もが食うために、なんとか生き延びようとしていた時代。中本もそんな「舞台づくり」に、参与していたと言っていいただろう。この時代に残された挿絵、絵画、舞台スケッチなどからは、後の「残された壁、人間断片」の画家とは異なる領野があったことを知る。それは60年代の社会・文化の変革を通して初めて現れる表現や感性の存在を逆説的にあわらにするとも思われる。



中本初期の紙作品は資源館に多数残っており、現在ボランティアの手で保存・整理が進められている。年代不明やサインのないものも含め、中本の足跡をたどり、戦後日本の文化・社会を語る上で好個の資料である。（副館長 山越邦夫）

<sup>1</sup> 泉三太郎「友情の深さを噛み締めながら」『美術ジャーナル』第11号（中本達也追悼号1973年9月、p.22）。

<sup>2</sup> 山根能文によって1948年に創設された人形劇団。東映動画（現・東映アニメーション）の母体となる。

<sup>3</sup> 高田美規雄「中本達也とその周辺」『中本達也と戦後美術の一段面』（山口県立美術館、1982年、p.145）。